

2015年秋季特別展

南蛮 -NAMBAN- 昇華



した芸術

ごあいさつ

当館は、2010年に大分の南蛮文化に関する特別展を開催いたしました。その際にご協力いただいた大分県津久見市より、再び貴重な資料をお借りし、今回は南蛮美術に焦点を当てた特別展を開催することとなりました。

本展覧会の目玉である南蛮屏風をはじめ、出陳される華やかな工芸品の数々は当時の職人たちの技術の高さを示しており、日欧双方の異国趣味を十分満たしていたことを想像させます。南蛮文化、そしてそれに続く紅毛文化は、それまでの日本の伝統にはない新しい文化を日本に花開かせ、日本美術の歴史において重要な画期となったのです。

そこで、津久見市が所蔵する南蛮様式によって制作された作品とあわせて、当館所蔵の紅毛文化関連資料を出品することにより、南蛮文化から紅毛文化へと転換していく流れを展示いたします。当館の所蔵品のなかでも、初めて出品するものがいくつもあり、今までとは一味違う雰囲気を感じていただければ幸いです。

末筆ではございますが、本特別展にご賛同いただきました津久見市のご担当者の皆様、そしてご協力いただきました関係各位に心より御礼申し上げます。

2015年11月7日

西南学院大学博物館

館長

宮崎克則

開催概要

フランスシスコ・ザビエルの来航は日本に文化的な昇華をもたらした。キリスト教の訪れとともに受容された異国からの文物は、日本に南蛮文化を花開かせる。異国、つまり西欧の聖俗における珍しいモノや風習は、屏風や工芸品のモチーフとして日本で好まれた。その流行はキリスト教という宗教的思想の伝道にも効果的な成果をもたらした。他方で、日本の漆工芸は宣教師をはじめとする西欧のひとびとを魅了する。漆器の祭具等が制作され、西欧へ持ち帰られた。異なる文化との出会いは新たな意匠を創出させ、国内外のひとびとを惹きつけている。日本におけるキリスト教の訪れは、南蛮様式とよばれる、新たな文化の“カタチ”を生み出したのである。

そこで、本展覧会では、日本文化に一画期をもたらした南蛮文化について、美術史的観点から取り上げていくものである。宗教的要素をもっていた南蛮美術が、日本人の手によってどのようにつくられていったのか。また、鎖国体制の確立によって、南蛮文化がどのように変わっていったのかについて紹介していくものとする。

|会期| 前期展示 |11.7| |土| ~|11.21| |土|
後期展示 |11.24| |火| ~|12.12| |土|

※前期と後期では、一部の展示内容を入替えます。

|会場| 西南学院大学博物館 特別展示室

|主催| 西南学院大学博物館

|後援| 福岡県・福岡県教育委員会・福岡市・福岡市教育委員会・
福岡市文化芸術振興財団

|入場料|
無料

|時間| 10:00~18:00 (入館は17:30まで)
日曜休館・11月23日は展示替えのため休館

目 次

ごあいさつ	
西南学院大学博物館 館長 宮崎 克則	2
開催概要	3
目次・凡例	4
I 萌芽の兆し－西欧文化の訪れ	5
II 創出された意匠－南蛮美術	10
III 新たな文化への転機－鎖国と紅毛文化	22
論考 西欧における南蛮・紅毛漆器の受容	
西南学院大学博物館 学芸員 内島美奈子	34
出島に出入りした商人や職人たち－オランダ商館員の文物収集	
西南学院大学博物館 学芸研究員 野藤 妙	36
用語解説	40
出品目録	41
関連年表	42
イベント情報・主要参考文献	43

凡例

- ◎本図録は西南学院大学博物館秋季特別展「南蛮—NAMBAN—昇華した芸術」〔会期：2015年11月7(土)～2015年12月12日(土)〕開催にあたり、作成したものである。
- ◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
- ◎会期中に展示替えを行うので、本図録に掲載された作品が展示されていないことがある。
- ◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。
- ◎本図録の資料解説および編集は内島美奈子(本学博物館学芸員)、野藤妙(本学博物館学芸研究員)がおこなった。英文翻訳ならびに編集補助には、山尾彩香(本学博物館学芸調査員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程)、阿部大地(同上)、吉岡香澄(同上)、筒井晴佳(同上・本学英文学部生)、秋田雄也(同上・本学国際文化学部生)があたった。



萌芽の兆し—西欧文化の訪れ

Signs of Beginnings: Arrival of Western Culture

1549年、イエズス会宣教師であるフランシスコ・ザビエルは、キリスト教を布教するため日本を目指し、鹿児島に到着した。以降、宣教師たちとともに、交易を目的としたポルトガルやスペインの船、いわゆる南蛮船が次々と来航する。南蛮船からもたらされる、聖俗入り混じる珍しいモノたちは、日本の人びとを大いに惹きつけた。西欧では日本に関する新しい情報がもたらされたことで、より正確な日本の地図が制作される。ここでは、東西交流の始まりにより、相互の関心が高まっていく様子を見ることができる。

Francisco de Xavier, a missionary of the Society of Jesus arrived at Kagoshima, Japan in 1549. Since then the Portuguese and Spanish people visited these shores one after another for the sake of mission work and trade. They were generally called *Namban* people, used to describe Western Europeans who visited Japan. Novelties brought by them fascinated the Japanese people. Meanwhile, in the West elaborately drawn maps of Japan were made on the basis of the information from those who visited Japan. These facts show us that the mutual interest was increasing in the West and Japan.





1. 聖フランシスコ・ザビエル像

Statue of St. Francisco Xavier

18世紀/インド
西南学院大学博物館

イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの木彫りの像。ザビエルは1533年にインドのゴアに司教区が設立されると、42年には同地に到着し、布教活動に取り組んだ。インドでの活動はまさに日本での伝道の布石となっていた。本資料は頭頂部に穴が開いていることから頭光(ニンブス)を表す部材があったと思われる。これはザビエルが聖人であることを示すものである。ゴアにはザビエルの遺骸が保管されており、同地で特別な信仰を得ている。(内島)



2. オルテリウス「アジア図」

Map of Asia by Ortelius

1570年/アントウェルペン(ベルギー)
津久見市

アントワープ生まれの地図製作者オルテリウスが1570年に出版した世界地図帳『世界の舞台』に収められているもの。中近東から極東の日本までアジア全域を描いている。日本は右上端に描かれ、その形は細長い大小の島と南に連なる島々で構成されている。本州と九州の大部分がつながっており、鹿児島島「Cangaxuma」だけが独立した島となっている。版を重ねるたびに、正確な情報が追加されていった。なお、『世界の舞台』にあるオルテリウス「世界図」は天正遣欧使節が日本に帰国後、豊臣秀吉に献上したものとされている。(内島)



3. ティセラ「日本図」

Map of Japan by Teixeira

1595年/アントウェルペン(ベルギー)
津久見市

ポルトガル人地図作家で、イエズス会宣教師でもあるティセラによる日本地図。1595年に改定・刊行されたオルテリウスの世界地図帳『世界の舞台』に初めて掲載された。北海道はないものの、日本は本州・九州・四国で構成され、ほぼ正確な対比で表記されている。日本から得た地図などを参考に描かれたと推測されている。豊前・豊後・筑前・肥前などほぼすべての国名(59カ国)が表記され、九州には日出・府内・白杵・佐賀関・鹿児島といった地名もみえる。教会のある場所を示していることもわかる。(内島)



4. 南蛮船絵馬

Votive Picture of Westerner's Ship

19世紀
西南学院大学博物館

鎖国体制確立以前、南蛮船は日本に多くの文物をもたらした。ポルトガルはマカオを拠点にし、スペインはマニラを拠点に貿易を展開していた。1624年にスペイン船、1639年にポルトガル船が日本への来航を禁じられると、オランダが貿易を独占することになる。しかし、南蛮船がもたらしていた華やかな時代は、後世にも伝えられるところとなり、本資料のような南蛮船を描いた絵馬が社寺に奉納されている。蓄財を祈念したものとされ、当時のきらびやかな時代は忘れられることなく、聞き伝えられていたことを示している。なお本図は、宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵する南蛮屏風の左隻部分をモチーフにしている。(内島)



5. 南蛮人来朝図絵馬

Votive Picture of Westerner's Parade

19世紀
西南学院大学博物館

ポルトガル人・スペイン人などを南蛮人というが、鎖国体制確立前、彼らがもたらした西洋の新しい文物は、南蛮文化として花開き、一世を風靡した。彼らが上陸して行列をなす姿は、狩野派をはじめとする絵師により描かれている。当時、南蛮人は財をもたらす存在とされたため、蓄財を祈念して絵馬に描かれ、社寺に本納された。本図は、南蛮文化館が所蔵している南蛮屏風の右隻部分をモチーフにしている。(内島)



II

創出された意匠－南蛮美術

The Created Design : Namban Art

16世紀から17世紀にかけての東西交流は南蛮美術を生み出した。西欧のファッションや舶来品をモチーフにした異国趣味の絵画・工芸品が制作される。なかでも南蛮屏風、南蛮漆器には質の高い作品が多く誕生した。さらに、西欧の宣教師たちを魅了した漆工芸品には受容する西欧の人びとの趣味に合わせた装飾がほどこされ、西欧で大きな人気を博した。後に日本を代表する工芸品としてJapanと呼ばれるようになる。国内外で好まれた屏風と漆器の美しさは、日本の技と異国文化が混ざり合って生まれた‘昇華した芸術’であることをまさに表している。本章では、南蛮美術において重要な位置を占める南蛮屏風、南蛮漆器を紹介する。

The inflow of different cultures produced Namban arts. Exotic paintings and craftworks were made in the motif of Western fashion and imported articles. Outstanding works were created, particularly Namban screen and Namban lacquer ware. Furthermore lacquer crafts, which fascinated Western missionaries, were decorated to suit preferences of the Westerner and achieved popularity in the West, and called “Japan” as most popular Japanese specialties.

The beauty of the Nanban screens and lacquer ware is created as foreign cultures and Japanese original culture merged, that is ‘sublimated art’.



南蛮屏風の世界

南蛮屏風は、南蛮渡来の文物を主題とした近世初期風俗画のひとつである。制作には狩野派の画家たちが主導的な役割を果たした。豊臣家の御用絵師であった狩野山楽(1559-1635)、狩野内膳(1570-1616)も手掛けており、秀吉による南蛮貿易の政策との関連も指摘される。90点ほど現存しており、いくつかの初期作品を類例として、類似した画面構成がとられている。また、描かれた舞台によって分類することができる。それは、舞台が中国と日本であるもの、日本と想像上の南蛮国、そして日本のみが描かれているものの3つである。日本のみを舞台としたものももっとも多く、南蛮人が日本にやってきたという情景がわかりやすく表現されている。

南蛮屏風の主要モチーフは、南蛮船(図1)、南蛮人のほか、カピタン・モールの行列(図2)、宣教師たち、さらには基督教の祭壇のようなもの(図3)などである。いくつかの南蛮屏風において聖体(顕示台)が南蛮船によって日本にもたらされ、南蛮寺まで行列を組み、奉納する様子が描かれている。しかし、17世紀前半に基督教信仰が禁止されると南蛮屏風から宗教的モチーフは消え交易をテーマとした構図に移行していく。モチーフやテーマを変えながらも南蛮屏風が求められ続けた背景には、南蛮船がお宝を積んだ宝船であると認識され、現世利益を祈願するために裕福な商人たちに好まれたという世俗的な用途があったとされる。このような商売繁盛、航海安全を祈願するものとしての一面から、南蛮屏風の内実はきわめて世俗的な異国趣味によるものであったことがうかがえる。(内島)



図1



図2



図3

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵(画像典拠:『南蛮屏風集成』中央公論美術出版、36-7頁)





6. 南蛮人遊楽図屏風

Namban Screens

江戸時代初期
太平洋セメント所蔵(津久見市寄託)

本資料には、唐人(中国人)の行列や、様々な動物、踊る南蛮人などが配され、物珍しさにまなざしを向ける日本の人びとが描かれており、たいへんにぎやかな情景が繰り広げられている。南蛮屏風には、南蛮船からもたらされた交易品が荷揚げされ、上陸した南蛮人の行列の様子が描かれるが、本資料には唐船が描いてあるのみである。また、キリスト教的モチーフは描かれておらず、カピタン・モール(南蛮船の司令官)は画面の隅に追いやられている。作者は多くの南蛮屏風を手掛けている狩野派によると推測されている。本資料は、宗教的モチーフから交易のモチーフへと移行していく、過渡期の貴重な作品とされている。(内島)

〈資料No6 部分解説〉



日本に上陸しようと、白い唐船が2隻入港している様子が見える。そのうちの一隻は立派な屋形を備えていて、そこに高位とみられる人物が座っている。その他の小舟に乗り込む人びとの何人かが、画面の外に視線を送っていることから、左隻が存在しており、海の彼方から到着した唐船あるいは南蛮船が描かれていたと推測される。黒い帽子とマントを身に付けた南蛮人も見つけられる。



屏風の主役ともなっているのは、中央に描かれた唐人行列である。画面下部では、船から降ろされた交易品を荷揚げしている様子がみとれる。船から荷が降ろされる風景は、南蛮屏風の定番の主題である。また、右上では南蛮人が楽器を奏で、ひとり片手片足をあげて踊り、日本人に曲芸を見せている。のちの南蛮屏風には「踊る南蛮人」を表す図像として描きこまれるようになる。



唐人行列の先頭に異国からもたらされた様々な動物が練り歩く様子が描かれている。屈強な虎の手綱をひくのは、鞆鞆人である。うち一頭は豹のように表されているが、雌の虎のつもりである。その前方には、麝香猫が2匹歩いている。



傘を捧げられた南蛮人は、カピタン・モールであると推測される。それまでの南蛮屏風では画面中央に配されることが多かったが、本作品では唐人行列に場所を取られている。



蓋裏

7. 蒔絵南蛮人双鶏硯箱

Writing Box with Portugese Figure and Two Chickens in *Makie* Lacquer

安土桃山～江戸時代初期
津久見市

方形で被せ蓋造りの硯箱。中には硯、水滴、懸子が一枚納められている。全体には黒漆塗りに梨地粉を蒔き付け、金蒔絵、銀薄板の平文などで文様を表している。蓋の表面には南蛮人と鶏、裏面には梅の木と鶯が表された。硯箱は平安時代以降、貴族や僧侶の生活に欠かせない調度として使用されていたとされる。本資料は南蛮人が描かれていることから日本人向けに作られたものである。(内島)



描かれた南蛮人

南蛮とは中国に由来する言葉で、日本ではおおむねポルトガルやスペインの人を指して使われる。当時の日本の人びとにとって、西欧の文物とともに南蛮人たちやそのお付きの人びとも珍しい関心の対象であり、彼らは装飾モチーフとして南蛮屏風や南蛮漆器などに描かれた。顔の特徴を誇張した表現がなされ、特に長い鼻や大きく膨らんだズボンをユーモラスに描いている。南蛮人をモチーフとしたものはポルトガル人が日本に滞在していた1570～1640年頃に制作され、現存する重箱、硯箱、文箱などの箱類や、折り畳み式の椅子、火薬筒、鞍、お盆、印籠などにもみることができる。(内島)



8. 蒔絵螺細花卉文小洋櫃

Small Coffer with Flowers in *Makie* Lacquer and Mother-of-Pearl

安土桃山～江戸時代初期
津久見市

輸出用に制作された小型の洋櫃。洋櫃とは長方形の箱に蒲鉾型の蓋をもつ、西欧で使用された調度品のひとつである。洋櫃の大きさは様々であり、大型のものは衣装ケースとして使用された。輸出漆器のなかで最も多く制作され、入子状に重ねて輸出されていた。本資料は器面に表わされた花卉の部分は螺鈿、葉の部分は金の平蒔絵で装飾されている。器面の縁取り文様には螺鈿による鋸歯文がほどこされた。留め具は他の南蛮漆器にもよくとり付けられているタイプで、西欧製のものである。装飾の特徴から初期の南蛮漆器と推測される。(内島)



9. 蒔絵螺鈿花樹鳥獸文箱

Letter Box with Flowers, Trees, Birds and
Animals in *Makie* Lacquer and Mother-of-Pearl

安土桃山～江戸時代初期
津久見市

輸出用に制作された文箱。背面に二つの金具で蓋が固定され、正面の金具で鍵を閉める簡単な造りのものである。竹や花木、兎や鳥、東屋など、多様なモチーフが、色彩豊かにちりばめられている。器面の縁取りには螺鈿と金の平蒔絵で七宝繋ぎ文が配されている。空間を埋め尽くし強調された縁取り文様は、これまでの日本の漆器の伝統にはみられない南蛮様式ならではのものである。多彩な螺鈿による装飾は異国趣味を感じさせる。(内島)



10. 蒔絵鮫皮貼花鳥文小箱

Small Box with Flowers and Birds in *Makie* Lacquer,
Mother-of-Pearl and Sharkskin Inlay

江戸時代初期
津久見市

輸出用に制作された屋形状の小箱。上部が高くなる造りは類例の少ない形状であるが、ポルトガルでは聖体容器(聖餅箱)として用いられていたと伝えられる。器面はすべて鮫皮貼りが施され、それぞれの中央には皮の上から鶴、梅鉢、花卉が装飾されている。その周囲には七宝繋ぎ文が平蒔絵で描かれている。下には安定するよう台がつけられており、引き出しもある。(内島)



11. 蒔絵螺鈿鮫皮貼社殿に花鳥文櫃

Chest with Shrine Buildings, Flowers and Birds
in *Makie* Lacquer, Mother-of-Pearl and Sharkskin Inlay

安土桃山～江戸時代初期
津久見市

輸出用に制作された櫃。両側面には持ち手があり、飾台の形式で天板が開く造りとなっている。全体は鮫皮貼りで覆われている。それぞれの器面には飾り枠が配され、蓋の表には社殿、正面の器面には花鳥など、様々なモチーフが螺鈿と平蒔絵で表されている。飾り枠や器面の周囲は螺鈿で装飾され、全体を華やかにしている。鮫皮の装飾は、1620年ごろにオランダ東インド会社が大量に鮫皮(実際にはエイの皮)を購入し、日本へ持ち込んで洋櫃やキャビネットを装飾させたことから始まっている。(内島)



12. 蒔絵螺鈿花鳥窓絵箆筒

Cabinet with Cartouches of Flowers and Birds
in *Makie* Lacquer and Mother-of-Pearl

江戸時代初期
津久見市

輸出用に制作された箆筒。観音開きの扉で複数の小さな引き出しがある。全体は黒漆に絵画的な装飾がなされている。ポルトガル人からオランダ人に交易相手が代わったことによって、漆器の装飾にも変化が見え始めた。南蛮様式の密集した装飾から、黒漆に余白を持たせた絵画的な装飾がなされており、本資料はその過渡期の作品である。特徴は器面の縁取りと窓絵と呼ばれる飾り枠があげられる。器面の外側の縁には螺鈿で菱形文、内側には二重の山形状の装飾が施されている。器面の外側には、窓絵、花鳥文様が表されている。さらに、中央の鍵穴を持つ部分には、西欧の建築をかたどった支柱とアーチの構成となっており、建物奥から鳥が現れたかのようなようである。引き出しひとつひとつに異なる植物の装飾がなされており、手が込んでいる作品であるといえる。(内島)



13. 蒔絵カルタ文印籠・蒔絵旗文根付

Inrō with Japanese Playing Cards in
Makie Lacquer, *Netsuke* with Flags in *Makie* lacquer

江戸時代後期
津久見市

うんすんカルタや大黒天図のカルタなどが表され、金銀の平蒔絵で装飾された印籠と付属の根付。印籠は江戸時代の武士が正装の際に必ず身につけるものであり、身につける人のセンスをアピールするためのアクセサリーでもあった。印籠は蒔絵で装飾され、装飾モチーフは多岐にわたっている。本資料はポルトガル語で手紙を意味する「カルタ」が装飾され、日本ではカード・ゲームの呼称となっている。カルタの意匠、根付の中国風の旗文は、異国趣味を意識したものと思われ、外国人向けに制作されたと推測される。(内島)



14. 南蛮船文鐔

Sword Guard with Design of Portuguese ship

江戸時代
津久見市

南蛮船をモチーフにした鐔で、西洋的意匠を取り入れた刀装具である。荒波の上に浮かぶ南蛮船は南蛮鐔の典型例である。舳先には南蛮人が配され、金象嵌が一部残っている。(内島)



15. 十字透かし鐔

Cross-Shaped Sword Guard

江戸時代
津久見市

十字風のデザインが特徴的な南蛮鐔。外円には金象嵌の装飾が施されている。(内島)



III

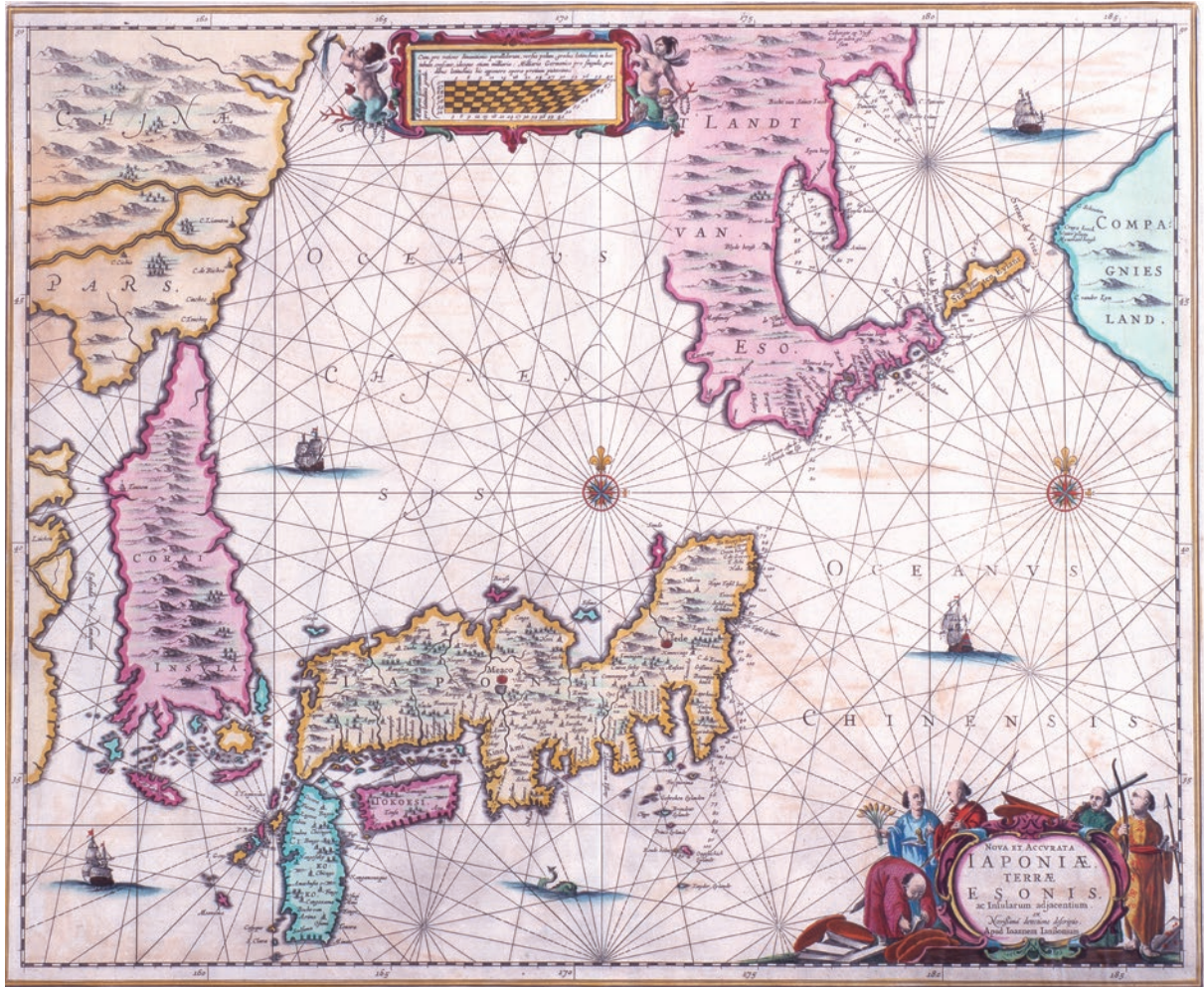
新たな文化への転機—鎖国と紅毛文化

The Turning Point to New Culture : Komo Culture Caused by National Isolation

17世紀前半、江戸幕府はキリスト教の布教・信仰を禁止し、宣教師の来日はもちろん、異国船の来航を厳しく制限する。そのなかでオランダは、出島に滞在することを条件に来航を許された。日本では、ポルトガル、スペインからオランダへと交易相手が代わったことで紅毛文化という新たな文化が花開いた。装飾モチーフとして人気であった南蛮人は、紅毛人と呼ばれたオランダ人にとって代わることになる。本章では、オランダ人が描かれた作品等をおして、日本の人びとを魅了した異国の文化が、“カタチ”を変えて享受され続けた様子を紹介する。

In the early 17th century, the Edo Shogunate prohibited the missionary work and faith of Christianity, and tightly restricted the visit of foreign ships, to say nothing of missionary. On the condition of the stay in Dejima (a small artificial island built as the single place of direct trade between Japan and foreign countries), the Dutch ships were permitted to trade, that is to say, Netherlands took the position as the official trade partner from Portugal and Spain. This led to flowering of *Komo* culture. Until then the picture of Namban-people had been often drawn, but it was replaced with the picture of the Dutch called *Komo*-people (“Red-haired people”). In this chapter, we shall see that foreign culture which fascinated the Japanese people was kept enjoying even after changing its “form”.





16. ヤンソン「日本・エゾ図」

Map of Japan and Ezo by Jansson

1659年
津久見市

本資料は、オランダの地図製作者であったヤンソンの地図帳に収録される。基本的にはそれまでに刊行されていた日本図を踏襲しながらも、オランダ東インド会社に所属していたフリースらの日本北方探検(1643年)による新情報を盛り込んでいる。地図には、調査された北海道の一部、さらにフリースが「カンパニースランド(東インド会社の土地)」と名付けたウルップ島や「スターテンアイランド(オランダ国の島)」と名付けたエトロフ島も描かれている。北海道がサハリン島やクナシリ島と地続きのように描かれているのは、この調査でそれぞれを分けるラ・ベルーズ海峡と根室海峡が見つからなかったためである。(野藤)



17. 南京国寧波湊明船之図

Picture of Chinese ship

江戸時代後期
西南学院大学博物館

江戸時代に日本へと来航していた中国船(ジャンク船)の図。南京の寧波(現在の浙江省)より出航した得泰船は、文政6(1823)年から天保11(1840)年まで長崎に来航した記録がある。楊啓堂が船主として初めて来航したのは文政5(1822)年のことであり、その後少なくとも文政10(1827)年まで来航していた。得泰船は文政9(1826)年、遠州(現在の静岡県)に漂着したことで知られており、その際の船主は楊啓堂であったため、本資料はその様子を描いたものである可能性が考えられる。図に付された説明によると、船は全長36間(約65.45m)、幅16間(約29.09m)、帆柱12丈(約36.36m)であり、総乗組員は116名であった。(野藤)

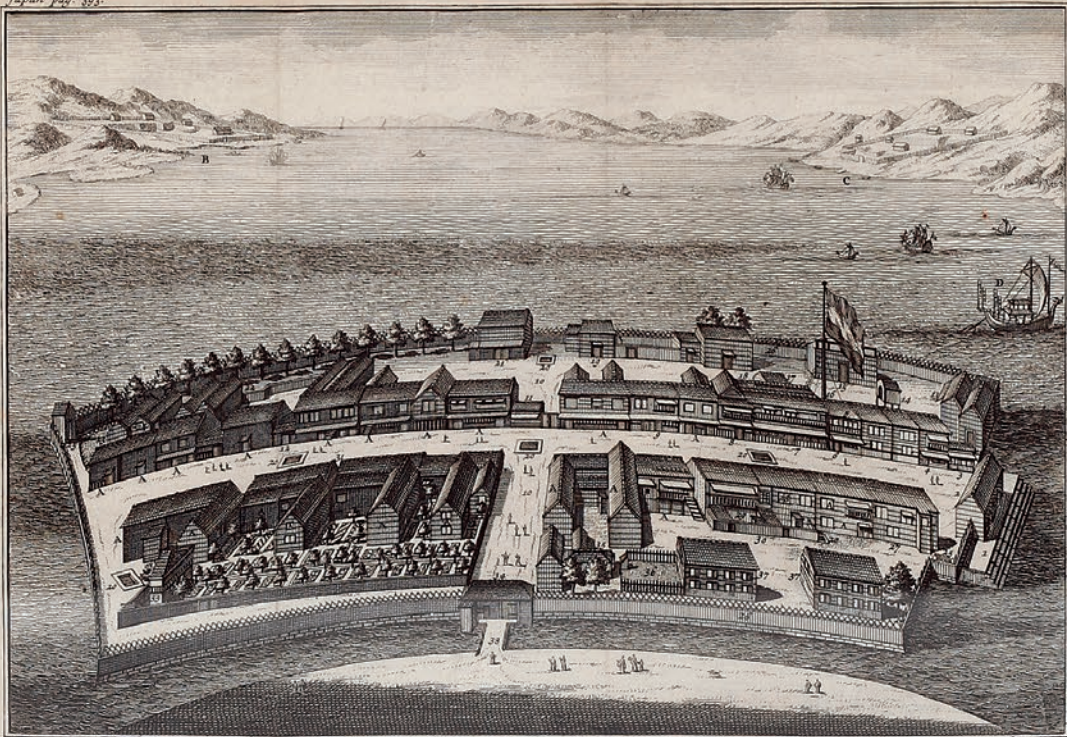


18. 唐蘭船長崎入津図

Picture of Foreign Ships Entering Nagasaki Port

19世紀
西南学院大学博物館

長崎に異国船が来航した際には、認められた国からの貿易船であるかどうかを確認するため長崎奉行所から検使たちが派遣され、旗合わせなどの手続きを踏まなければならなかった。そうしてようやく長崎港への入港が認められるのである。本資料ではすでに入港し停泊中のオランダ船と中国船、さらに曳船に引かれ入港している中国船が描かれている。浮世絵師歌川貞秀(橋本貞秀、五雲亭貞秀)画。(野藤)



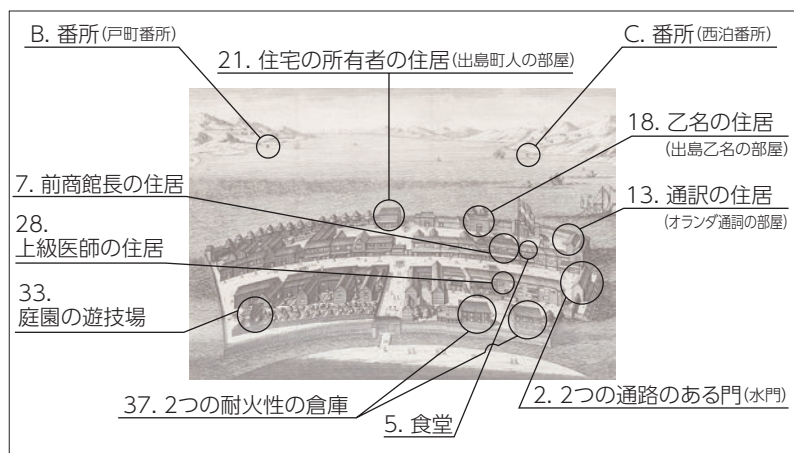
"T EILANDJE DESIMA VERBLYF PLAATS DER HOLLANDERS IN JAPAN.
Na de Aftekening, onder den Heere Voogt beruyfende, opgesteld.

- | | | |
|--|---|------------------------------------|
| 1 De Trap. | 14 't Duirokok. | 27 Woning van den Pakhuis meester. |
| 2 De Poort met 2 Doorgangen. | 15 Combuis en Woning van den Bottelier. | 28 Oppermeester. |
| 3 Zitplaats der Gecommitteerden. | 16 Maggestok. | 29 Dispensien. |
| 4 De Woning van 't Nieuw Opperhoofd. | 17 't Plat of Balcon van 't Opperhoofd. | 30 De Tuin agter de Woning. |
| 5 Ceteaal. | 18 Wykmeesters woning. | 31 De ingang van den Tuin. |
| 6 Dispens. | 19 De Ductroef. | 32 't Compagnies tuin. |
| 7 De Woning van 't Oud Opperhoofd. | 20 Waterbakken. | 33 't Speelhuus in den Tuin. |
| 8 van den Boekhouder der Negotie. | 21 De Woning van de Eijenaars der Huizen. | 34 't Keizers Wagipoort. |
| 9 van den tweeden Persoon. | 22 Particuliere Pakhuizen. | 35 Yendtie huis. |
| 10 De Kruisstraat. | 23 De Kerstul. | 36 Blackvel. |
| 11 't Wagthuis voor de Brantgeretschappen. | 24 't Ziekenhuus. | 37 Twee Brand Veye Takhuizen. |
| 12 De ingang van de Particulieren Pakhuizen. | 25 Twee Wagthuizen. | 38 De Brug na de Stad Nagasaki. |
| 13 De Woning der Tolken. | 26 De Dagge of Schutting rondom het Eiland. | A Pakhuizen. |
| 14 Wagthuis. | C Wagthuis. | D Den Japan's Jagt. |

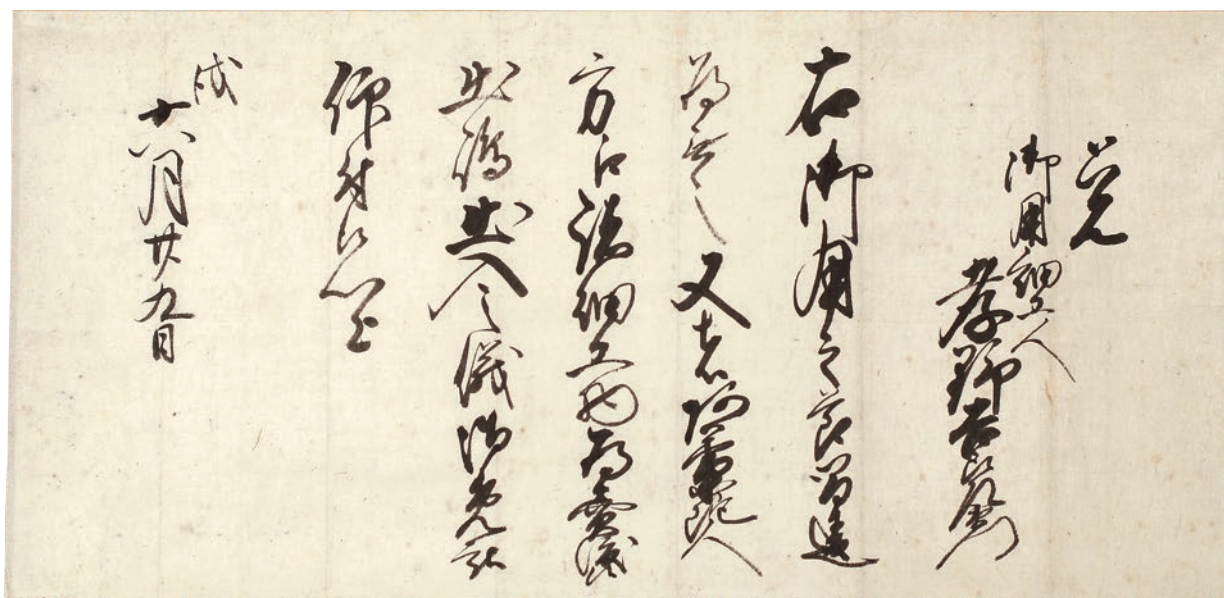
19. 出島図

Map of Dejima

1735年頃
西南学院大学博物館



トマス・サーモン『万国民の現代史』(オランダ語版)収録の出島図であり、17世紀末から18世紀初頭にかけて商館員として来日したフォート所蔵の絵が原画となっている。寛永13(1636)年、出島はポルトガル人を收容するという目的で中島川下流に築造された。ポルトガル人追放後の寛永18(1641)年、平戸から空き地となっていた出島にオランダ商館が移転され、商館員たちは南側約233m、北側約190m、東側・西側約70mという非常に狭い空間での生活を余儀なくされた。長崎奉行所の許可なしで出島から外出することはできず、商館医として来日したケンペルは、出島について“牢屋住まいにも等しい”と述べた。(野藤)

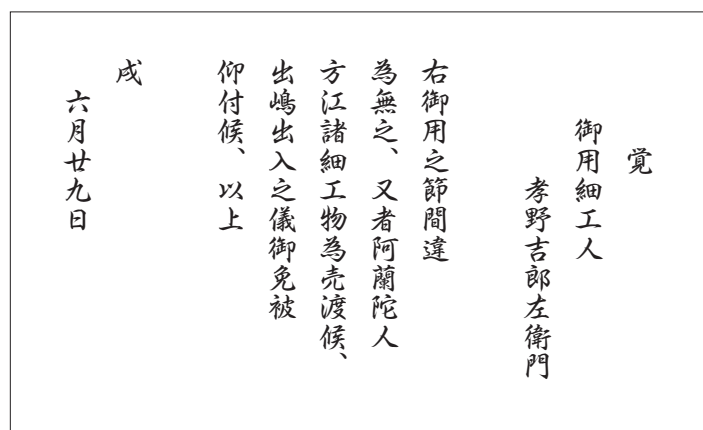


20. 長崎阿蘭陀館出入許状(写)

Document of Admission for Dutch Trading House of Nagasaki (Copy)

西南学院大学博物館

出島へ出入りをする際には長崎奉行所の許可が必要であった。通常出島乙名やオランダ通詞、長崎奉行所の役人以外の人々は、誓詞を行い、出島乙名によって発行される門鑑を持ってようやく出島に出入りすることができた。本資料はそのような手続きの際に、御用細工人の孝野吉郎左衛門に出された許可状と考えられる。(野藤)



21. VOCコイン

Coin of VOC

1746年
西南学院大学博物館



オランダ東インド会社(Vereenigde Oost-Indische Compagnie)の社章であるVOCのモノグラムが刻印されたドイツ銅貨。表面には铸造された年である1746という数字が記されている。オランダ国内で製造されたドイツ銅貨は、東インド会社の支配地域での取引に用いられていた。18世紀後半になるとイギリスとの戦争によりオランダ本国から運ばれる銅貨が不足したため、日本より輸出された銅を材料として銅貨を铸造したという。(野藤)



神崎帰帆

22. 紅毛人プラケット

Small Wall Hanging with
Picture of a Dutch Trader

18～19世紀
西南学院大学博物館

プラケットは西洋の壁掛けのことであり、大型のものをブランク、小型のものをプラケットという。表面には犬を連れたオランダ人の姿とともに、螺鈿細工による草花の装飾が見られ、裏面には貿易を終えて帰帆する唐船が描かれている。この唐船と周囲の風景は、長崎の版元である大和屋の磯野文斎が発行した連作物「長崎八景」のひとつ、「神崎帰帆」を原画としている。ブランク、プラケットは、西欧の肖像画や風景画などを原画とした西欧向けの輸出品として多く制作されたが、本資料は長崎土産として国内向けに制作されたものと考えられる。(野藤)

23. 紅毛人硯屏

Inkstone Screen with Picture of a Dutch Trader

19世紀
西南学院大学博物館

硯屏とは硯のそばに置く衝立で、ほこりなどを防ぐ目的で使用
する。本資料はもともと硯屏として作られたのではなく、あと
から硯屏として仕立て直されたものである可能性が高い。腰に
サーベルを下げ、後ろを向いているオランダ人の姿が描かれて
おり、周囲には螺鈿細工が施されている。職人たちの高い技術
がうかがえるとともに、オランダ人モチーフが日用品にも用い
られていることから当時の異国趣味が垣間見られる。(野藤)



描かれた紅毛人

日本人のオランダ人に対する興味は、彼らを題材とした様々な工芸品や絵、本などからうかがえる。南蛮人が膨れたズボンやマントを皆着用して描かれたように、オランダ人も一見してわかるよう、様々なモチーフが用いられた。それらが繰り返しシンボルとして描かれることにより、オランダ人イメージが形成されていったと考えられる。その例を以下で具体的に紹介したい。

本草学者であった後藤梨春は『紅毛談』のなかで、「其国(オランダ)人相、余国よりハ丈高く、色しろく、眼中に星あり、頭に短き赤毛あり」と述べた。また、森島中良は『紅毛雑話』の附録として、帽子、襟、髪、上着、下着、ズボン、靴下、靴に関する説明を図入りで説明した。彼らが記したように、江戸時代のオランダ人像はみな、大きな眼で鼻は高く、帽子をかぶり、その下の髪は赤や茶の巻髪、華美で色鮮やかなコートを羽織っており、半ズボンと白い靴下を履いている。

容姿以外にもオランダ人の定型がある。クレーパイプはオランダ人を象徴するものとして用いられた。その喫煙具はヨーロッパで使用されていたもので、オランダは主要な生産国であった。出島のオランダ商館跡から多数クレーパイプが出土しており、オランダ商館員たちが日常的に用いていたと考えられる。

小型犬もオランダ人とともに描かれた。蘭方医の広川舜は「阿蘭陀犬」を出島で飼われている動物として紹介しており、「其かたち軽拳に見へ耳たれ多くは白色にて黒點あり。其毛至ってほそく奇麗なり。」と記した(『長崎聞見録』)。異国との貿易で運ばれたものは文物に限らず、珍しい動物たちもその中に含まれた。連れて来られたラクダや象、鳥など、様々な動物は献上されたり、見世物にされたりした。

またオランダ人だけではなく、江戸参府中、宿に滞在している彼らを見物する日本人も葛飾北斎によって描かれた(『画本東都遊』)。オランダ人にとってもそのような日本人の様子は印象深かったようであり、商館員フィッセルは「宿の内外の騒ぎは到底筆では表現できないほどであった。(中略)彼ら民衆はオランダ人を目見ようとしてお互いに押し合いへし合いしたのであった。」(庄司三男・沼田次郎訳『日本風俗備考』平凡社、1978年)と述べている。江戸参府は異国の人々を見ることが数少ない機会であった。

自分たち日本人とは異なる容姿や文化を持つオランダ人や珍しい動物たちは、まだ見ぬ異国を想像させるのに一役買っていたのであろう。描かれた多くのオランダ人像を見ると、江戸時代の人々の好奇心を大いに満たしていたことと想像される。(野藤)



24. 紅毛人遠見之図

Dutch Looking at Scenery

19世紀
西南学院大学博物館

長崎絵または長崎版画と呼ばれる長崎土産の絵は、江戸中期頃から明治初期にかけて作成され人気を博した。図柄として採用されたのは異国人や船など、長崎ならではのエキゾチックな題材であった。本資料ではオランダ商館員がクレーパイプを吸いながら大砲を鳴らすオランダ船を遠くに眺めている。その傍らの従者は望遠鏡を肩に担ぎ、犬にパンを与えているという。1枚の絵の中に異国を象徴する様々な要素が盛り込まれている。(野藤)

25. 阿蘭陀人狩猟図

Dutch Hunting

江戸時代後期
西南学院大学博物館

一人は獲物を肩に担ぎ、もう一人は鉄砲に獲物をぶらさげている2名のオランダ人たちが2匹の猟犬とともに描かれた泥絵である。泥絵とは胡粉を混ぜた安価な泥絵具を用いた洋風画のことを指し、江戸や上方、長崎などで制作され土産物として売られた。長崎においては土地柄にふさわしく異国の風景や風俗、異国船を描いたものが多く見られる。泥絵のほとんどは署名や落款がなく、本資料も作者不詳である。(野藤)





26. 紅毛人饗宴図盆

Tray with the Dutch at Table

西南学院大学博物館

扇型の盆にオランダ商館員たちの宴会の様子が描かれている。ワインやナイフ、フォークといった日本と全く異なるオランダ人たちの食生活は当時の人々にとって興味深いものであった。食事風景は版画でも用いられたテーマのひとつで、本資料と酷似したものが残っている。給仕している2名が省かれ1名多く着席しているなど、異なる点も見られるものの、本資料はこのような版画をもとに制作されたと思われる。絵だけではなく、中央上部には「HOLLANDER」(オランダ人)とあり、左右にも横文字が記されている。版画に書かれた左右の文字は、左が「上客」、右が「出張先のオランダ人」という意味であったという記事もあるが(『前哲六無斎遺草』)、判読不能である。(野藤)

参考図：「阿蘭陀人図」(饗宴図) 日本通運株式会社所蔵
 (画像典拠：長崎市出島史跡整備審議会「出島図—その景観と変遷—」長崎市、1987年、214頁)



論考



西欧における南蛮・紅毛漆器の受容

西南学院大学博物館 学芸員
内島美奈子

はじめに

16世紀後半から約一世紀の間、日本の漆器が西欧で人気を博し多く輸出された。それらの漆器は日本で花開いた南蛮文化、そして紅毛文化のなかで生み出されたことから、それぞれ南蛮漆器、紅毛漆器と称される。一時期は日本を代表する交易品となるが、17世紀の終わり頃から次第に漆器の輸出も下火になっていく。それから数百年を経た今、それらの漆器は日本で注目を集めており、輸出先の西欧から日本へと逆輸入されるという現象がおこっている。本展覧会で資料を借用させていただいた大分県津久見市の資料もそのひとつである¹。近年、日本における南蛮・紅毛漆器の所蔵が増えるにつれ研究も盛んとなり、現在の所蔵状況の調査は各国で進められている。

そこで本稿では、先行研究を参考に漆器の輸出の歴史的背景をふまえ、西欧における南蛮・紅毛漆器の受容を概観したい。

1. 漆器の輸出の歴史

1549年のキリスト教伝来とともに、日本とポルトガルとの交易がはじまった。1570年に長崎がポルトガル船のために開港されたのを機に、布教と交易の規模が拡大した。また、同時期、ポルトガルと世界進出を競っていたスペインがアジアにおける交易と布教のためフィリピンのマニラを拠点に日本へ船を出した。こうして異国の文物が日本にもたらされたことで、新しい文化が誕生する。当時の西欧人（おもに、ポルトガル人、スペイン人）の呼称から南蛮文化と呼ばれ、室町時代から江戸時代にかけて花開いた。美術の分野では南蛮美術と呼ばれ、西欧の絵画技法が導入され、初期洋風画などが生まれた。そして、南蛮船よりもたらされる珍しい文物や南蛮人を装飾モチーフとした、異国趣味溢れる南蛮屏風や南蛮漆器が制作され、南蛮美術の主要な位置を占めている。

そのなかで、南蛮漆器は日本人の異国趣味を満たすだけでなく、西欧の人びとも受容された²。漆工芸を用いて西欧人の生活様式に合わせた様々な家具調度品が制作されたのである。椅子、筆筒、机など、現存するものだけで46品目を数えることができる³。装飾には西欧人の考える「日本」らしさが反映され、日本の伝統にはなかった新しい漆器が誕生することになる。現在は、それらを「輸出漆器」として、日本人が受容するために制作された漆器と区別している。

当初の輸出先の中心はポルトガルだったが、1639年にポルトガル船の来航が禁止され、西欧ではオランダのみが通商を許されることになり、輸出の中心はオランダに代わった。オランダによる漆器購入が本格化するのは1640年代頃である。この時期の漆器は、オランダ人を紅毛人と呼ぶことから、紅毛漆器と称される。17世紀後半には、ヨーロッパ各地で模倣漆器が産業として確立し、イギリスではその技法を「Japanning（ジャパニング）」と呼んだ⁴。その後、高級な日本の漆器の受容は減り、安価な模倣漆器がとって代わったとされている。

2. 南蛮漆器の様式と受容者の変遷 –南蛮漆器から紅毛漆器へ

ポルトガル・スペインからオランダへという受容者の変化は漆器の装飾の変化に影響を与えていると指摘されている。最初の受容者は、16世紀後半に日本へキリスト教を布教にやって来たポルトガルやスペインのカトリック教会の宣教師たちである。彼らは日本の漆工芸に魅せられ、キリスト教の儀式に使用する道具、つまり祭具を漆器で制作するよう注文した。祭具の制作を依頼した背景には、布教活動には欠かせない聖画や祭儀具が、日本の地で不足していたことがあるとされる。聖画は現地の日本人に描かせることになり、画学舎が設立され多くの作品が制作される。祭具の場合は、見た目も美しく、かつ丈夫な漆工芸で制作されたのである。カトリック教会の修道会であるイエズス会より派遣されたアレッサンドロ・ヴァリニャーノは、日本の文化を尊重し、日本の趣味にあった聖画を描かせたという。漆器の祭具制作の始まりもイエズス会の方針が関連するかもしれない。そうして、イエス・キリストや聖母マリアの画像を納める聖龕(図1)や聖餅箱(図2)、書見台、聖水盤などが生み出された⁵。図2においてはザビエルやヴァリニャーノの所属するイエズス会の紋章が描かれている。その後、様々な家具調度品が漆工芸で生み出された。

こうした初期の漆器は、南蛮様式と呼ばれる。その様式の特徴は、螺鈿を多用し、文様には幾何学的な傾向がある⁶。花樹



図1 花樹鳥獸蒔絵螺鈿聖龕
(東京国立博物館所蔵)



図2 IHS蒔絵螺鈿聖餅箱
(サントリー美術館所蔵)



図3 花樹鳥獸蒔絵螺鈿鮫皮貼洋櫃
(東京国立博物館所蔵)

や鳥獸などの文様は日本の伝統的な蒔絵に描かれてきたものだが、螺鈿や蒔絵で器面を埋め尽くす密集した様子は、日本の伝統にはないものであった。螺鈿の多用はインド=ポルトガル様式の影響と指摘され西欧人の考える漠然とした東洋的な「日本」らしさの反映であるとされる。また、漆器の形態は西洋の箆笥や櫃を範としており、箆笥や櫃には脚がつけられているものをみることが出来る(図3)。つまり、初期の南蛮漆器は、装飾におけるインドに由来する東洋的な要素と、形態における西洋的な要素、さらには日本の技術が混ざり合った結果、誕生したものであるといえる。これはポルトガル人たちの趣向に合わせた結果ともいえる。そして、日本の交易相手がスペイン・ポルトガルからオランダに移ると、漆器の様式は新たな交易者の趣向に合わせて変化する。オランダの漆器購入が本格化する前の1630-40年代には、過渡期の装飾が認められ、中間様式とされる。飾り窓もしくは窓絵と呼ばれる装飾が多用されるのが特徴である。本展覧会の出品資料では、No.11と12に見られる。また、その時期には鮫皮貼という技術も誕生し、オランダ人が鮫皮を用いるよう依頼したとされる。飾り窓の中に絵画的な図柄が表され、次第に飾り窓の枠が取り払われていく。絵画様式と呼ばれ、南蛮様式から一転して、余白を持たせ、黒漆の地に金蒔絵で文様を表し、コントラストが印象的な様式となる。こうして紅毛漆器が誕生する。

おわりに

最後に、受容された西欧において日本の漆器がどのような機能をもっていたのかみておきたい。キリスト教の祭具として南蛮漆器が受容されたスペインでは、スペイン国内で保存される南蛮漆器の数は100にもものぼるとい⁷。そのうち半数は教会関係の施設で保存されており、個人が寄付したものとされる。その用途は基本的に聖餅を入れるための櫃であり、南蛮漆器の櫃には「契約の箱」のイメージが託されていると指摘される。そして、輸出漆器の大半は家具調度品であり、その受容には17世紀の西欧において王侯貴族の間で東洋からの異国趣味の品々を邸内に飾ることが大流行したという背景がある。その一方で、輸入する国によってはもっぱら贈答品として用いられていた。その例として、1582年に天正遣欧少年使節団が日本の漆器を贈り物として携えていたことが明らかとなっている⁸。また、イギリスでは日本の漆器は公式な貿易商品ではなく、高級な贈答品として需要され続けたという⁹。輸出漆器には、特別の注文による贈答品として制作されたものと、一般の交易商品とがあり、両者は、品質の面において大きく異なっていた。

以上、西欧における南蛮・紅毛漆器の受容についてみてきた。現在の西欧における漆器の所蔵の調査が進んでおり、当時の受容の様子がより明らかとなりつつある¹⁰。現在でも西欧各地に残る日本の南蛮・紅毛漆器は当時の人気をうかがわせるものである。

1 『宗麟と南蛮文化-津久見市収集10年の精華』(津久見市、1996年)。
 2 南蛮漆器、紅毛漆器については主に以下を参照した。日高薫『異国の表象-近世輸出漆器の創造力』ブリュッケ、2008年；山崎剛編『日本の美術426 海を渡った日本漆器I(16・17世紀)』至文堂、2001年；日高薫編『日本の美術427 海を渡った日本漆器II(18・19世紀)』至文堂、2001年；加藤寛編『日本の美術428 海を渡った日本漆器III(技法と表現)』至文堂、2002年；神戸市立博物館『南蛮美術の光と影-泰西王侯騎馬図屏風の謎』2011年。
 3 Oliver Impey, Christiaan Jörg, *Japanese export lacquer, 1580-1850*, Hotei, c2005.
 4 山崎、前掲書、18頁。
 5 土井久美子「蒔絵聖龕-桃山時代輸出漆器資料」『漆工史』第11巻、1988年、21-29頁。
 6 螺鈿の多用については、近年では、インド北西部のグジャラートあたりの螺鈿細工に発想を得たと考えるのが定説となっている。(日高、前掲書、2001年、58頁)
 7 川村やよい「スペイン所在の南蛮漆器について」『国華』第1415号、36-49頁。
 8 ただし、日高氏が述べるように、西欧人向けに制作された漆器、もしくは使節のために特別に制作された漆器ではなかった。記録からスペインには、水盤、長文箱、根重が贈られたことが明らかとなっている。(日高薫「異国へ贈られた漆器-天正遣欧使節の土産物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第140集、2008年、97-115頁)。
 9 日高、前掲書、2008年、49頁。
 10 たとえば、イタリア各地に所蔵される日本漆器について小山真由美の一連の研究がある。「鳥葡萄蒔絵螺鈿洋櫃(慶長遣欧使節の遺品): ヴァチカン蔵ボルゲーゼ関係文書による考證」『国華』第119号編、第2冊、17-35頁、2013年；「ローマ・ヴェネツィア宮国立博物館蔵「花鳥獅子蒔絵螺鈿書箆笥」とドーリア・パンフィーリ家手稿資料」『国華』第117号編、第10冊、31-41頁、2012年；「イタリアの聖地ロレートに伝世した書見台-現存作品と収録目録の記載について」『漆工史』40-51頁、2008年；「ピッティ宮殿所蔵(黒漆花鳥葡萄蒔絵螺鈿円筒形箱)-メデイチ家文書の記録と枢機卿帽子箱の可能性」『漆工史』33-45頁、2004年；「海外派遣在伊日本美術工芸品及び在欧在日関連美術工芸品継続調査-未公開、未調査在伊漆工芸收藏品を中心として(「美術に関する国際交流の援助」研究報告-2000年度援助)」『鹿島美術財団年報』第18号、671-692頁、2000年；「海外派遣 在伊日本美術工芸品及び在欧在日関連美術工芸品調査-非公開、未調査在伊收藏品を中心として(「美術に関する国際交流の援助」研究報告)- (1999年度援助)」『鹿島美術財団年報』第17号、726-742頁、1999年。

出島に出入りした商人や職人たち —オランダ商館員の文物収集

西南学院大学博物館 学芸研究員
野藤 妙

はじめに

慶長5(1600)年にリーフデ号が豊後に漂着し、慶長14(1609)年には徳川家康が朱印状を発給したことにより日蘭貿易が開始された。その後、ヨーロッパの国々のなかで唯一オランダだけが通商を認められるようになるが、寛永18(1641)年に、最初のオランダ商館が置かれた平戸から、ポルトガル人を隔離するために築造された出島へと商館を移すことになり、彼らの生活は制約の多いものとなった。出島の表門にある制札には、許可なくしてオランダ商館員は出島の外に出てはならないという簡条や日本人の出入りに関する簡条が記載されていた。しかし、そのような環境に置かれながらも、出島に勤務した商館員たちのなかには、多種多様な日本の文物を収集し、持ち帰った者がいた。彼らはどのようにしてそれらのものを入手できたのであろうか。

出島から外に出ることが制限されていた商館員たちが物を入手する方法として、出島に出入りしている諸色売込人や商人から購入する、江戸参府の際に購入する、懇意にしている日本人との物々交換や贈与によって入手する、などが考えられる。そこで、本稿では商館員に文物を供給した商人や職人の出島への出入りに注目したい。

1. 出島における日本人とオランダ商館員

出島には限られた日本人しか出入りすることができず、出島に出入りが許可されたからといって自由に交流ができるわけではなかった。商館長として文政9(1826)年来日したメイラン¹は著書『日本』の中で、出島での日本人との関係について「日本人たちがオランダ人たちに対してとる予防手段は、常にできるかぎり、オランダ人と日本人住民との間のあらゆる関係ならびに交際を切り離すことを目的としており、とりわけこの関係により再び新しい宗教の教理、および特にキリスト教の教理が伝えられる可能性があるとの恐れから、そしてさらにこのようにして、禁止されている貿易を、とりわけ妨害はしないが、少なくとも極度に困難にしておこうとの目的があることは明瞭である。」²と述べ、日本人との交流が制限されていることを記した。確かにメイランの言うように、日本人と商館員の間には個人的な関係が結びにくいようにさまざまな措置が取られていたのであろう³。しかし、オランダ商館長の日記を見ると、長崎の地役人を統括していた町年寄、出島の管理者であった出島乙名、組頭、オランダ通詞、貿易品の鑑定を行う目利、日雇、遊女、諸色売込人、大工、奉行所の役人など、実際には多くの日本人たちが出入りしていることがわかり、特に貿易期間中には100人以上が出島で働いていたと言われる⁴。残された書簡などからも日本人と商館員が親交を結んでいた様子が見えてくる。そのように出入りが許された様々な日本人たちが商館員の生活を支えており、そのなかには商人や職人も含まれた。彼らが出島に出入りするために必要であった手続きについては次項で示す。

2. 日本人の出島出入り許可

2-1. 門鑑と誓詞

以下にあげる史料は出島乙名を務めた若杉家に残る『勤方書』⁵である。この史料中にはオランダ船の入津から出帆までの乙名の仕事に関する記事が載せられている。

【史料1】

一 出嶋門出入札之事

右木札ニ仕出嶋乙名兩人焼印仕、年番町年寄方江差出、町年寄中焼印相済候を、出入之小役并諸商人日雇等迄向々江貸渡門出入仕せ候、勿論其者居町乙名・組頭より札預り請合証文取之貸渡申候、阿蘭陀船出帆後右札取集、年番町年寄方江納置、翌年入津前ニ乙名方江請取向々江貸渡申候、尤年中出入之者共江者定貸ニ仕置、居町乙名・組頭より札預り請合証文取之置申候

【史料2】

一 手附筆者小役并雇入之者出入諸商人之事

右代候節者人柄遂吟味候上、猶又居町乙名江掛合無別条旨書付取之、願書ニ相添年番町年寄方江差出御聞濟之上申渡候、右之者共誓詞仕候節者年番町年寄方江召連罷出申候、尤雇入之者共者年々誓詞仕候、(後略)

【史料1】には、出島に出入りする際に、出島乙名と町年寄の焼印のある木札が必要であることが書かれている。町年寄とは、長崎の地役人を統括する人々で、その年の代表を年番町年寄と言った。図1は現存する木札であり、門鑑と呼ばれる。上部に穴が開いており、恐らくその穴に紐を通し、首や腰に下げて使用したのであろう。さらに【史料2】では、誓詞についても述べられている。元禄3(1690)年来日したケンペル⁶によると、本人の地位や職務によって異なるが、誓詞には、約定に違反しないこと、さらに違反した場合には家族・縁者までに類が及ぶことなどが明記されており、血判をしなければならなかったという⁷。このような手続きを経てようやく出島に出入りすることができた。



表
裏
図1 出島門鑑(九州大学記録資料館九州文化史資料部門所蔵)

2-2. 長崎阿蘭陀館出入許状

本特別展で出陳した「長崎阿蘭陀館出入許状」は、出島への出入りを検討するうえで重要な史料である。本史料で出入りが許可された孝野吉郎左衛門とは長崎の時計師である幸野吉郎左衛門であると推測される。渡辺庫輔氏は「御用時計師幸野吉郎左衛門と其代々」⁸のなかで、幸野氏文書中にオランダ商館に出入りが許可された史料があることを紹介している。そこで引用された文言は当館所蔵の史料と合致しており、享保18(1733)年に出されたとしている。幸野吉郎左衛門は将軍家の香箱時計を修繕したことから「御用」と冠されていた、と渡辺氏は述べている。その後、幸野氏は「御時計師役」となり、代々長崎奉行の御用を務めた。後に諸事情によって時計師は増やされ、幸野家だけではなく御幡家も御用時計師として名を連ねた。本史料を見ると、「覚」と表題があり、宛名、内容が記され、最後に月日が付されているが、差出人の名はない。表題が異なるため一概には言えないが、このように簡素な文書の形式は長崎奉行所が発給する指令書などと類似しており、奉行所から出された出島出入り許可状の写しと推測される。時代は下がるが、

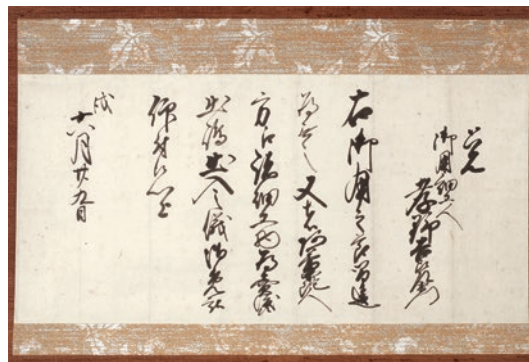


図2 長崎阿蘭陀館出入許状
(西南学院大学博物館所蔵)

安政2年(1855)年のオランダ通詞の公務日記『萬記帳』⁹のなかには、例えば

【史料3】

同日

- 一 御年番所乙名目付年番宛用事御切紙ニ付品川藤十郎差出候処、筑前医師河野禎造蘭医対談として出島出入御免達書一通御渡ニ相成候ニ付目付大小通詞江為知遣ス

とあり、出島への出入りの際の御免状があったことがわかる。管見の限りにおいては同様の史料の現存を確認できていないため検討は十分ではなく、今後も研究を続ける必要がある。

3. 出島出入りの商人・職人

出島では抜荷や禁制品の授受を防止するために、出島に出入りする際その持ち物も検査しなければならなかった。出島に出入りした人物名や持ち物の記録が『出島持出入之品御割印帳』(長崎歴史文化博物館所蔵。以下、【史料4】とする)として出島乙名と年番オランダ通詞によって作成された。表紙によると、文政7(1824)年正月、文政7年9月、文政11(1828)年8月、天保7(1836)年11月の4か月分の記録ということになるが、この史料は後に屏風の地張として使用されたため、断片的にしか残されていない。

【史料4】に記載されている内容については、例をあげると

「 覚
 一 盆山 弍ツ 諸色売込人 政之助
 右者阿蘭陀人相調申候ニ付持入申候
 去十一月廿五日持出
 一 箱 壱ツ 右同人
 右者繕ひ出来仕候ニ付持入申候
 一 皮文庫 壱ツ 右同人
 右者阿蘭陀人相調不申候ニ付持出申候
 一 ふとん 壱ツ 諸色売込人 政之助
 一 更紗 壱切
 右者ふとん裏替として持出申候
 〆五桁
 右之通出嶋持出入為仕度奉願候以上
 申 正月 」

とあり、出島乙名と年番オランダ通詞の名前が書かれ、印鑑が捺されている。さらに、品物の名前が書かれているところなどには割印が捺されている。【史料4】の抜粋箇所からは、盆山と箱については商館員と取引成立したが、不成立に終わることもあり、皮文庫は出島の外に持ち出していること、売買だけではなく修理なども行っていたことがわかる。【史料4】は、順番が正確でなく、全てを収録されていない可能性も高いことから、時期などの情報は考慮せず出入りした人物とその肩書に注目したものを表に示した。どのような人々が出入りしていたのか見てみよう。

諸色売込人	政之助
	八郎太
	寿助
	寅藏
	助五郎
	文治
	作一
箔屋	忠太郎
	太兵衛
焼物商人	秀三郎
	平次右衛門
焼物并小間物商人	金之助
	盛五郎
小間物商人	卯兵衛
	直吉
青貝細工人	武右衛門
絵師	登与助
大工	勘平次
磨鞘師	政藏
時斗師	御幡栄三
鋳物師	弥五左衛門

表 『出島持出入之品御割印帳』で
 出入りが確認される商人、職人

3-1. 諸色売込人

この史料中に最も多く登場するのは諸色売込人である。諸色売込人はコンプラドールやこんぶら仲間、買物使などとも呼ばれた。商館員フィッセル¹⁰は、商館員たちが「現金を所持して日本の商人たちと取引することは禁止されている。商館のために出入りを許されている調達人たちがいるが、彼らはすべてのものを自分で製作するわけではなく、要求された品物を契約して出島に供給するのである¹¹。」と述べている。彼らは自分たちで物を買うことができない商館員に代わり、水や薪などの日用品や食料品から必要な人材まで、幅広く調達を請け負っていた¹²。【史料4】では、木綿の着物や金剛草履などの日用品と思しき品々や、カナリアなどの動物を持って入ったことが記されている。

3-2. 出島出入りの商人

【史料4】より、箔屋、焼物商人、小間物商人、焼物并小間物商人、青貝細工人が出入りをしていることがわかる。箔屋は反物、焼物商人は伊万里焼をそれぞれ扱う商人たちであったと考えられる。また、小間物商人として記載されている卯兵衛や直吉とは、漆器を主に扱った笹屋卯兵衛、笹屋直吉であろう¹³。さらに青貝細工人として武右衛門の名が見られる。彼らは旧暦の8月末に出島内に「見世」を出すことができ、そこで蒔絵や小間物、反物、伊万里焼、鋳物などを商館員に販売していた。それ以外の日も許可をもらえば出入りし、商館員の注文に応じていた¹⁴。

【史料5】

一 阿蘭陀人詔物諸商人より持入之事

右品々遂吟味乙名・年番通詞連印願書年番町年寄割印相済候上、御裏印申請表門当番江相渡持出入為仕申候、尤流金并赤銅類之細工物者御役所江持参仕掛改候而証文差上、其末例之通持入申候、且又紅毛人所持之金銀銭并同古地かねを以細工詔物仕候節其段前以御伺申上、御聞済之上掛目相改御裏印申請持出、細工人江相渡申候、出来之上是又御役所江持参仕掛目相改御裏印申請持入、阿蘭陀人江相渡申候

【史料5】は、前述の『勤方書』から抜粋の、商館員から受けた注文品の売買に関する記事である。『出島持出入之品御割印帳』はこのようやり取りの際に作成されたと思われる。商館員に売り渡してもよいものか検査を受け、手続きを経てようやく商館員の手へ渡った。青貝屋への商館員の注文については勝盛氏や永松氏などによって紹介されている¹⁵が、さらに、デン・ハーグの国立公文書館(オランダ)所蔵の商館長ブロムホフ¹⁶関連史料中には、「青貝細工武右衛門」からの値段書付¹⁷が、ルール大学ポーフム校所蔵のシーボルト¹⁸関係諸史料中には「笹屋」からの値段書付が残されており、ブロムホフが春慶塗の台、櫛箱(小

道具添)を金2両1分で購入していることなどがわかる。

そのほかには、「時計師」として御幡栄三の名前が見られる。前述のように御幡家は御用時計師であり、奉行所の分限帳にも掲載された¹⁹。大工や絵師登与助(川原慶賀)の名前も見られ、諸色売込人や出島出入りが許可された商人・職人、さらには奉行所の御用職人など、さまざまな人々が商館員に物を提供していた。

おわりに

本稿では、日本の多様な文物が商館員の手に渡り、西欧へともたらされていくなかで、商館員に商品を売却した商人とその出島への出入りについて述べた。彼らは、定められた方法に則り出島に出入りし、商館員の収集品を豊かにした。商館員にとって彼らの商品は高額すぎると思う物もあったようであるが、最高の品を供給してくれる、とも述べている²⁰。商館員が物を収集する背景には、時代状況は言うに及ばず、それぞれの置かれていた環境や求められた成果、個人的趣味、利益、名声など、さまざまな要因が混在していたと思われる。彼らのうち、そのコレクションがまとまった形で確認できる者として、既出のプロムホフ、フィッセル、シーボルトがあげられる。彼らの収集品は地図、和本、絵画、模型、陶磁器、衣服、標本、職人の道具など多岐に渡っており、その中には漆器も含まれた。彼らが文物を収集した目的の一つに、文化13(1816)年にオランダ国王ウィレム1世によってデン・ハーグに創設された王立骨董陳列室の存在があったと考えられる。3名のうち、最も早く来日したプロムホフは、王立骨董陳列室にふさわしいものを収集するように陳列室初代室長より命じられており、来日期間中や帰国後に陳列室に収集品を寄贈、売却した²¹。文政7(1824)年に刊行された陳列室の展示案内²²を見ると、最も大きい部屋が「日本」の展示室に充てられ、部屋の中央にはプロムホフが寄贈した出島の模型(3m×6.5m)²³、そのほかの展示ケースには梨地などの漆器類が多く置かれ、壁には江戸や京都、長崎などの地図が掛けられていたことがわかる。続くフィッセル、シーボルトも収集品を売却し、オランダ国王のコレクションを拡充させた。それらの収集品はまだ日本についてあまり知られていなかった時代に、ヨーロッパの人々が「日本」をイメージする一助となったであろう。彼らの収集品はライデン国立民族学博物館やアムステルダム国立博物館へと移され、現在も当時の日欧交流の一端を垣間見ることができる。



図3 ライデン国立民族学博物館

- 1 Germain Felix Meijlan (1785-1831年)、来日1826-1830年
- 2 庄司三男訳『メラン日本』雄松堂出版、2002年
- 3 例えば、出島で働く大工などは1年交替であり、毎年替わる日本人と数年で交代する日本人との組み合わせによって個人的な関係を構成しにくい構造をもっていたという指摘がある。(横山一徳「出島下層労働力研究序説」『オランダ商館長の見た日本 ティツング往復書翰集』吉川弘文館、2005年)
- 4 長崎県史編集委員会編『長崎県史』対外交渉編、1986年
- 5 長崎史学会『長崎関係史料選集』第三集、長崎史学会、2007年
- 6 Engelbert Kaempfer (1651-1716年)、来日1690-1692年
- 7 エンゲルベルト・ケンペル、今井正訳『改訂・増補日本誌-日本の歴史と紀行-』第5分冊、霞ヶ関出版株式会社、2001年
- 8 渡辺庫輔『長崎の時計師』日本時計倶楽部私版、1952年
- 9 6月3日の記事。長崎県立長崎図書館『オランダ通詞会所記録 安政二年 萬記帳』長崎県立長崎図書館、2001年
- 10 Johan Frederik van Overmeer Fisscher (1800-1848年)、来日1820-1829年
- 11 庄司三男、沼田次郎訳『日本風俗備考』2、平凡社、1978年
- 12 前掲、横山 2005年
- 13 諸色売込人であった川島家の史料より、卯兵衛や直吉が笹屋卯兵衛、笹屋直吉であることが指摘されている。(勝盛典子『近世異国趣味美術の史的研究』臨川書店、2011年)
- 14 前掲の『勤方書』(長崎史学会 2007年)に次のようにある。
 - 一 諸商人出嶋江見世出之事
右例年八月末見世構之儀、年番町年寄方江乙名より御伺申上、御聞済之上小屋掛為仕、蒔絵・小間物・反物・伊万里焼物・鋳物等見世飾り仕、紅毛人日々見世江罷出候ニ付、乙名・組頭・通詞目附・大小通詞之内見廻り取締心を付申候
但、調物仕候節者何品何程相調申度段、買主之紅毛人より横文字書付を以通詞方江申出、諸商人よりも売渡之品立并代銀付乙名方江一々相届候上引合仕、其品乙名部屋江取寄江会所出嶋掛り之者通詞・出嶋乙名・組頭之内立合相申渡候、追而双方書付ニ割印いたし売込銀高仕分帳ニ相添会所江差出申候、且又諸商人之儀、前々ハ平日出入仕居申候処、去ル戌年以來常出入御止メ被為成、入津より出帆迄者日々出入御免被仰付候、尤平日紅毛人調物等仕候節者御伺申上、御聞済之上出入仕せ候
- 15 前掲、勝盛 2011年
永松実『漆工師青貝屋右衛門の注文帳』『新シーボルト研究II 社会・文化・芸術篇』八坂書房、2003年
- 16 Jan Cock Blomhoff (1779-1853年)、来日1809-1813年、1817-1824年
- 17 右衛門からの値段書付の宛名はオランダ通詞であった「荒木豊吉」となっている。書付は日本語の横にオランダ語訳が付されているため、通詞を経由してプロムホフに渡されたものと推測される。また勝盛氏は、文化3年から嘉永3年まで青貝屋が輸出した細工物は京都製であることを明らかにされているが(前掲、勝盛 2011年)、国立公文書館所蔵の値段書付から商品代金とともに京都からの運送費が計上されていることがわかり、興味深い。
- 18 Philipp Franz von Siebold (1796-1866年)、来日1823-1830年(1回目)
- 19 石田千尋「天保期の分限帳-史料紹介 長崎県立長崎図書館所蔵「分限帳」-(下)」『鶴見大学紀要』第41号、第4部 人文・社会自然科学編、2004年
- 20 前掲、庄司・沼田 1978年
- 21 マティ・フォラー 「ライデンのシーボルト・コレクション」『黄昏のトクガワ・ジャパニーズシーボルト父子の見た日本』日本放送出版協会、1998年
国立歴史民俗博物館『オランダへわたった大工道具』国立歴史民俗博物館、2000年
Rudolf Effert, *Royal Cabinets and Auxiliary Branches: Origins of the National Museum of Ethnology, 1816-1883*, CNWS Publications, 2008
- 22 Reinier Pieter van de Kastele, *Handleiding tot de bezigtiging van het Koninklijk Kabinet van Zeldzaamheden op Mauritshuis, in 's Gravenhage*, 1824
- 23 前掲、フォラー 1998年。前掲、Effert 2008年

漆工芸の技法・文様の用語解説

七宝繫文

円を4分の1ずつ重ねた連続文。

鮫皮貼さめがわ

エイの皮を器面に貼り付け、黒漆を塗り込め研ぎ出す技法。黒漆の中から白い水玉文様が浮かび上がるのが特徴である。

蒔絵まきえ

漆を使った装飾技法。文様を表す部分にあらかじめ漆を塗り、その漆が乾かないうちに金銀の細かい粉を蒔き付けて文様とする。技法の違いから次の3種類に分けられる。①研出蒔絵とぎだし(塗った漆の上に金銀の粉を蒔き付け、乾燥後に表面全体に漆を塗り込み、金銀の粉が表面に出るまで炭などの研磨剤で研ぎ出す技法)②高蒔絵(下地や漆で文様とする部分を高く盛り上げ、蒔絵を行ったあと、さらに研出して文様とする技法)③平蒔絵(目的とする文様を漆で描きその上に金銀粉を蒔き付ける。漆の乾燥後に粉の表面を磨いて仕上げる技法)。さらに、金属粉を蒔いた後、絵漆が乾かないうちに尖った串などで蒔絵部分を引っかくようにして線を描く針描はりがきという技法もある。

梨地なしじ

黒漆の表面に粉を蒔く地蒔き装飾のひとつ。鱸粉を平らに延ばして作った梨地粉を蒔き、その上に透漆を塗り、研ぎ出して仕上げる。表面のテクスチャーが果物の梨の肌に似ているところから梨地と呼ばれる。

螺鈿らでん

巻貝や二枚貝の殻を加工して漆の表面に張り付けて文様をあらわす技法。

参考文献：小松大秀・加藤寛『漆芸品の鑑賞基礎知識』至文堂、1997年

■《南蛮－NAMBAN－昇華した芸術》出品予定一覧

	資料名	英訳名	数量	時代	法量(単位: cm)	所蔵
I. 萌芽の兆し－西欧文化の訪れ Signs of Beginnings : Arrival of Western Culture						
1	聖フランシスコ・ザビエル像	Statue of St. Francisco Xavier	1	18世紀/インド	高20.5	西南学院大学博物館
2	オルテリウス「アジア図」	Map of Asia by Ortelius	1	1570年/アントウェルペン(ベルギー)	42.4×56.2	津久見市
3	テイセラ「日本図」	Map of Japan by Teixeira	1	1595年/アントウェルペン(ベルギー)	44.6×56.0	津久見市
4	南蛮船絵馬	Votive Picture of Westerner's Ship	1	19世紀	60.0×91.0	西南学院大学博物館
5	南蛮人來朝図絵馬	Votive Picture of Westerner's Parade	1	19世紀	62.0×93.0	西南学院大学博物館
II. 創出された意匠－南蛮美術 The Created Design : Namban Art						
6	南蛮人遊楽図屏風	Namban Screens	六曲一隻	江戸時代初期	159.4×356.0	太平洋セメント所蔵(津久見市寄託)
7	蒔絵南蛮人双鶏硯箱	Writing Box with Portugese Figure and Two Chickens in <i>Makie</i> Lacquer	1合(2枚)	安土桃山～江戸時代初期	21.2×21.2×44	津久見市
8	蒔絵螺細花卉文小洋櫃	Small Coffe with Flowers in <i>Makie</i> Lacquer and Mother-of-Pearl	1	安土桃山～江戸時代初期	22.5×13.3×15.5	津久見市
9	蒔絵螺細花樹鳥獸文箱	Letter Box with Flowers, Trees, Birds and Animals in <i>Makie</i> Lacquer and Mother-of-Pearl	1	安土桃山～江戸時代初期	15.3×30.6×13.3	津久見市
10	蒔絵鮫皮貼花鳥文小箱	Small Box with Flowers and Birds in <i>Makie</i> Lacquer, Mother-of-Pearl and Sharkskin Inlay	1	江戸時代初期	8.8×17.9×11.4	津久見市
11	蒔絵螺細鮫皮貼社殿に花鳥文櫃	Chest with Shrine Buildings, Flowers and Birds in <i>Makie</i> Lacquer, Mother-of-Pearl and Sharkskin Inlay	1合(2枚)	安土桃山～江戸時代初期	31.4×50.0×25.0	津久見市
12	蒔絵螺細花鳥窓絵筆筒	Cabinet with Cartouches of Flowers and Birds in <i>Makie</i> Lacquer and Mother-of-Pearl	1基(2枚)	江戸時代初期	44.0×30.2×33.1	津久見市
13	蒔絵カルタ文印籠・蒔絵旗文根付	<i>Inrō</i> with Japanese Playing Cards in <i>Makie</i> Lacquer <i>Netsuke</i> with Flags in <i>Makie</i> lacquer	1	江戸時代後期	9.0×5.4	津久見市
14	南蛮船文鐔	Sword Guard with Design of Portuguese ship	1	江戸時代	径6.8×7.0	津久見市
15	十字透かし鐔	Cross-Shaped Sword Guard	1	江戸時代	径8.0	津久見市
III. 新たな文化への転機－鎖国と紅毛文化 The Turning Point to New Culture : <i>Komo</i> Culture Caused by National Isolation						
16	ヤンソン「日本・エゾ図」	Map of Japan and Ezo by Jansson	1	1659年	52.7×62.7	津久見市
17	南京国寧波湊明船之図	Picture of Chinese ship	1	江戸時代後期	25.8×36.0	西南学院大学博物館
18	唐蘭船長崎入津図	Picture of Foreign Ships Entering Nagasaki Port	1	19世紀	39.4×49.7	西南学院大学博物館
19	出島図	Map of Dejima	1	1735年頃	25.7×31.8	西南学院大学博物館
20	長崎阿蘭陀館出入許状(写)	Document of Admission for Dutch Trading House of Nagasaki (Copy)	1		16.8×34.3	西南学院大学博物館
21	VOCコイン	Coin of VOC	1	1746年	径2.0	西南学院大学博物館
22	紅毛人プラケット	Small Wall Hanging with Picture of a Dutch Trader	1	18～19世紀	15.2×9.0	西南学院大学博物館
23	紅毛人硯屏	Inkstone Screen with Picture of a Dutch Trader	1	19世紀	24.4×16.6	西南学院大学博物館
24	紅毛人遠見之図	Dutch Looking at Scenery	1	19世紀	32.7×22.0	西南学院大学博物館
25	阿蘭陀人狩獵図	Dutch Hunting	1	江戸時代後期	28.5×104.3	西南学院大学博物館
26	紅毛人饗宴図盆	Tray with the Dutch at Table	1		43.0×80.0	西南学院大学博物館

■関連年表

和歴	西暦	出来事	南蛮漆器の様式の変遷	
天文3年	1534年	カトリック男子修道会、イエズス会創設。	初期南蛮様式 (16世紀後半～17世紀前半)	
天文12年	1543年	ポルトガル人が種子島に漂着、鉄砲が伝来。		
天文18年	1549年	イエズス会宣教師ザビエルが鹿児島へ到着。領主の島津貴久よりキリスト教布教の許可を与えられる。		
天文20年	1551年	大友義鎮、ザビエルを府内に招き、キリスト教布教を許可。その後1562年に出家し、宗麟と号す。		
天正6年	1578年	大友宗麟、イエズス会宣教師カブラルから洗礼を受ける。洗礼名をドン・フランシスコと名乗る。		
天正7年	1579年	織田信長、イエズス会宣教師オルガンチノへ安土に教会堂建設を許可。		
天正8年	1580年	巡察司ヴァリニャーノ、白杵で大友宗麟に謁見。コレジオ(大神学校)を豊後府内に、白杵にノビシヤド(イエズス会員養成機関)を建設。		
天正9年	1581年	織田信長、ヴァリニャーノへ安土に学校建設を許可。そして宣教師オルガンチノが責任者となりセミナリオ(小神学校)建設。		
天正10年	1582年	天正遣欧少年使節団、長崎を出発。		
天正15年	1587年	豊臣軍、九州を平定。博多にてパテレン追放令を出す。		
天正18年	1590年	天正遣欧使節、帰国。		
文禄元年	1592年	豊臣秀吉、京都、堺、長崎の商人に異国渡海朱印状を与える。		
慶長元年	1596年	サン・フェリペ号事件。禁教令を再び発布。二十六聖人殉教、長崎で処刑を行う。		
慶長7年	1602年	オランダが東インド会社を設立。		
慶長8年	1603年	徳川家康、征夷大將軍となる。		
慶長17年	1612年	幕府、禁教令発布。		
元和8年	1622年	元和大殉教。キリタン55人長崎で処刑		
寛永10年	1633年	奉書船以外の渡航禁止し外国在留5年以上の日本人の帰国禁止。		中間様式 (1630年代～1640年代)
寛永11年	1634年	長崎出島の築造開始。		
寛永12年	1635年	外国船の入港・貿易を平戸に限定。日本人の海外渡航と帰国を禁止。		
寛永13年	1636年	ポルトガル人とその家族を国外追放。長崎出島完成。		
寛永14年	1637年	島原・天草一揆(翌年鎮圧)。		
寛永16年	1639年	ポルトガル船の来航禁止。		
寛永17年	1640年	宗門改役の設置。		
寛永18年	1641年	オランダ商館を平戸から出島に移す。		
寛政4年	1792年	ロシア使節ラクスマンと大黒屋光太夫と共に根室に来航。	絵画的様式 (17世紀中頃～17世紀後期)	
文化元年	1804年	ロシア使節レザーノフ、長崎に来航。		
文化5年	1808年	フェートン号事件。		
文政6年	1823年	シーボルト、オランダ商館医として長崎出島へ。		
文政8年	1825年	異国船打払令発布。		
文政11年	1828年	ドイツ人医師シーボルトの伊能図持ち出しが発覚。		
天保8年	1837年	大塩平八郎の乱。モリソン号事件。		
天保10年	1839年	蛮社の獄。アヘン戦争(～1840年)		
弘化3年	1846年	異国船打払令再び発布。		
嘉永6年	1853年	アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー、浦賀に来航。ロシア使節プチャーチン、長崎に来航。		
安政元年	1854年	日米和親条約、日英和親条約、日露和親条約調印。		
安政2年	1855年	日蘭和親条約調印。		
安政5年	1858年	列強諸国と修好条約調印。安政の大獄。		
万延元年	1860年	桜田門外の変。井伊直弼暗殺される。日普修好通商条約締結。		
文久2年	1862年	生麦事件。		
文久3年	1863年	下関事件。長州藩が外国船に砲撃。薩英戦争。		
慶応3年	1867年	大政奉還。王政復古の号令。浦上四番崩れ。		
明治元年	1868年	戊辰戦争(～1869年)。江戸城開城。江戸を東京へ改称。元号を明治へ。一世一元を定める。五榜の掲示。		
明治4年	1871年	日清修好条約締結。廃藩置県。岩倉使節団、横浜から出港。		
明治6年	1873年	キリスト教禁止の高札を撤去。		

参考文献

- 二木謙一『年表戦国史』新人物往来社 1978年
- 朝尾直弘編『日本の近世 第1巻 世界史のなかの近世』中央公論社 1991年
- 辻達也編『日本の近世 第2巻 天皇と将軍』中央公論社 1991年
- 平川新『全集 日本の歴史 第12巻 文明国を目指して』小学館 2008年
- 牧原憲夫『全集 日本の歴史 第13巻 開国への道』小学館 2008年
- 歴史学研究会『世界史史料 6 ヨーロッパ近代社会の形成から帝国主義へ』岩波書店 2007年
- 歴史学研究会『世界史史料 4 東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ』岩波書店 2010年

イベント情報

第18回 特別展関連公開講演会

日時	12月5日(土) 14:00～15:30
場所	西南学院大学博物館2階講堂
講師	内島美奈子(西南学院大学博物館教員)
題目	「南蛮-NAMBAN-昇華した芸術」
講師	川畑憲子(九州国立博物館主任研究員)
題目	「江戸時代の輸出漆器」

せいなんこどもワークショップ2015「拓本をとろう！」

日時	11月28日(土) 10:00～12:00
場所	西南学院大学博物館2階講堂

主要参考文献

・南蛮文化関連文献

- 社団法人OAG・ドイツ東洋文化研究協会『西洋人の描いた日本地図－ジパングからシーボルトまで』(社団法人OAG・ドイツ東洋文化研究協会、1993年)
- 茨城県立歴史館『神戸市立博物館所蔵名品展 南蛮美術と洋風画』(茨城県立歴史館、1995年)
- 津久見市『宗麟と南蛮文化－津久見市収集10年の精華－』(津久見市、1996年)
- 東京国立博物館『江戸蒔絵－光悦・光琳・羊遊斎』(東京国立博物館、2002年)
- Oliver Impey, Christiaan Jörg, *Japanese export lacquer, 1580-1850*, Hotei, c2005
- 坂本満、成澤勝嗣、泉万里、日高薫、澤田和人、中野満美子『南蛮屏風集成』(中央公論美術出版、2008年)
- 日高薫『異国の象徴－近世輸出漆器の想像力』(株式会社ブリュッケ、2008年)
- 安高啓明『南蛮の鼓動－大分に残るキリシタン文化－』(西南学院大学博物館、2010年)
- サントリー美術館、神戸市立博物館、日本経済新聞社『南蛮美術の光と影－泰西王侯騎馬図屏風の謎』(日本経済新聞社、2011年)

・紅毛文化関連文献

- 長崎美術同好会『長崎古版画』第1集(長崎美術同好会、1964年)
- 野々上慶一『長崎古版画』(三彩社、1970年)
- 長崎市出島史跡整備審議会『出島図－その景観と変遷－』(長崎市、1987年)
- 小野忠重『ガラス絵と泥絵』(河出書房新社、1990年)
- 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』(北海道大学図書刊行会、1999年)
- 長崎歴史文化博物館、たばこと塩の博物館『阿蘭陀とNIPPON』(長崎歴史文化博物館、たばこと塩の博物館、2009年)
- 竹田和夫編『歴史のなかの金・銀・銅－鉱山文化の所産』(勉誠出版株式会社、2013年)

西南学院大学博物館2015年度秋季特別展

南蛮—NAMBAN—昇華した芸術

編 集 内島美奈子 野藤妙

編集補助 山尾彩香 阿部大地 吉岡香澄

筒井晴佳 秋田雄也

英文翻訳 阿部大地 吉岡香澄 筒井晴佳

発 行 西南学院大学博物館

〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

発 行 日 2015(平成27)年11月7日

印 刷 株式会社 インテックス福岡